

人間のセクシュアリティについて

平 等 文 博

は じ め に

「セクシュアリティ」(sexuality)とは、「性的な」(sexual)の名詞形で、「性的なもの／こと」を意味する言葉である。人間にとって「性的な」とされる領域は、性的欲求、関心、ファンタジー、振る舞い、行為、魅力、関係、指向など非常に多岐にわたっており、それらすべてを統合するような実体としてのセクシュアリティなるものが存在するのかわくは疑問である。また、「セクシュアリティ」という概念自体が近代の歴史的産物であることは、つとに指摘されている通りである¹⁾。したがってセクシュアリティは、ちょうど人間性(humanity)と同じように、固定した実体性をもつものというより、生物学的な、あるいは歴史的・社会的・文化的な基礎を持ち、それらによって規定されつつも、私たちの「前に投げられた問題」(problem)として存在していると見るべきだろう。つまりそれは、人間や人間関係のあり方をどのように価値選択し共に創り出すかという問題である。

1 生命の再生産と性システム

人間のセクシュアリティは今日、生物学的な自然の地平をはるかに超え、歴史的・社会的・文化的な諸条件と相関しながら多様な展開を示している。したがって人間のセクシュアリティをめぐる問題を、もっぱら身体生理的な面から説明したり、「本能と理性の葛藤」として描くことは、ほとんど有効性をもちえない。しかし、だからといって人間のセクシュアリティに生物学的な内容や側面が消失してしまったわけではもちろんない。

無生物と異なる生物(生命体)の特徴は、「代謝」と「生殖」である。その生殖には①「無性生殖(asexual reproduction)」と②「有性生殖(sexual reproduction)」という二つの仕組み(システム)がある。地球に生命が誕生したのは約38億年前であるが、有性生殖の仕組みが生まれたのは、約15～20億年前と考えられている²⁾。

性(sex)をもたない生命体の生殖の仕組みが、単独で自己増殖する無性生殖である。無性生殖は、仕組みが簡単で容易に増殖することができる利点がある一方、約60兆個の細胞からなる人間のような多細胞で複雑な生命体には不可能であり³⁾、また環境の多様な変

1) たとえば、ジェフリー・ウィークス『セクシュアリティ』河出書房新社、1996、など。

2) 団まりな『性のお話をしましょう』哲学書房、2005、など参照。

3) 有性生殖をする生物でありながら無性生殖と同じような繁殖の仕方を人為的にやろうとするのが「クローン(clone)技術」である。1996年にイギリスでクローン技術による羊(Dolly)が誕生した

化に対する適応度が低いという難点をもつ。

それに対して、生殖において異なる役割を担う「性」をもつ生命体の生殖の仕組みが有性生殖である。動物の場合だと、卵子と精子という異なる生殖細胞（配偶子）をつくり出すメスとオスが交配し、受精させることで新たな生命体を生み出す。微妙に異なるメス（女性／母）由来の遺伝子とオス（男性／父）由来の遺伝子とが対になって新たな生命体（子）の遺伝子セットをつくることで、有性生殖では親とは異なる遺伝子セットを子がもつことになり、遺伝的に多様な生命体が創出される。こうした有性生殖の仕組みは、複雑な多細胞生物が形成されていくのに適した仕組みであり、遺伝的に多様な個体が生み出されるために生存環境の変化に対する適応度も高いとされる。その反面、配偶子の生成、両性の出会いから新たな生命誕生までのプロセスが非常に複雑で、途中でさまざまな困難が生じやすい。

このように、性の生物学的なルーツは生殖にあり、生命の再生産という目的に沿って動物の性行動は形作られている。人間のセクシュアリティはそのような地平をはるかに超えているとはいえ、人間もまた今日に至るまで性のシステムによって子孫を残し続けてきていることには違いなく、人間の性欲求や性行動においても、生殖的側面がまったく失われたわけではない。むしろ近年においては、人間のセクシュアリティを他の動物との比較や生殖という側面から科学的に解明しようとする研究が盛んにおこなわれている。

2 自然科学的なセクシュアリティ研究

「激しく燃え上がった恋の炎がやがて薄れてしまうのはなぜか」といった身近な性に関わる関心事に対し、男と女の自然（本性）という次元で答えようとする自然科学的研究の成果は、一般向けの書籍や2009年1月に放送されたNHKスペシャル「女と男～最新科学が読み解く性～」⁴⁾などのテレビ番組でたびたび紹介されている。

人間のセクシュアリティの一面に実証科学的に迫った研究は、それなりに興味深い。上記の番組は、どのような体形の女性を男性が好むのか、ある研究者が女性のイラストを用いて調査した結果を紹介している。その結果、細め・標準・太めについては好みが分かれたが、いずれの場合も多く男性があげたのはウエストとヒップの比率を7:10にしたイラストだったというのである。研究者はこの調査結果に、健康な女性のウエストとヒップの比率、“腰のくびれ”と妊娠のしやすさの関係という別のデータを重ね合わせて、「男性はひと目見ただけで女性を評価できるようプログラムされています。若くて健康かどうか、ウエストとヒップの比率を見るのです」と結論づけている。

のが哺乳動物での初出で、現在では馬や牛などの家畜でクローンの個体がつくられているほか、ネコやイヌなどのペット動物のクローニングも商業的に実施されている。人間のクローニングは世界各国で禁止されているが、フランスの「ラエリアン・ムーブメント」が2003年に「クローン人間」を誕生させたと発表し話題となった（事実と確認されていない）。

4) NHKスペシャル取材班『だから、男と女はすれ違う』ダイヤモンド社、2009、として放送の後に出版された（現在は『女と男』と改題され、角川文庫に所収）。

女性の体形といえいわゆるスリーサイズ（BWH）が話題になることが多いし、「腰のくびれ」を強調するための補正用下着（corset）や服装もある。このように、男性は女性の生殖（出産）能力の高さ（若さと健康）の指標となる WH 比を無意識のうちに見て評価し、「魅力的な（体形の）女性」だと好感するというのである。

こうした説明は人間のセクシュアリティをどれほど解明していると言えるだろうか。上記の例は、男性が女性を選ぶというシチュエーションにおいて、男性は女性の魅力は無意識のうちに「生殖」能力によって判定しているのだと述べている。男性＝選ぶ性／女性＝選ばれる性という非対称な関係性をこの研究者が男女に配分しているかは不明だが、性が生殖システムとして生まれた以上、生殖に関わる側面が人間の性選択においても働いていることは十分にありうる。しかし、19世紀から20世紀のヨーロッパで、「腰のくびれ」を強調するためのコルセットが流行したのは、女性をもっぱら子を産むための存在として見る近代的な性別役割の意識と制度の形成が背景となっている。

日本においても性別役割を前提とした「女らしさ／男らしさ」のジェンダー意識が性規範（性別道徳）と結びついて教え込まれていくのは、近代化に邁進する明治の半ば以降のことである⁵⁾。「男は外で仕事／女は内で家事・育児」という近代家族の仕組みが日本にも導入されてくると、女性はもっぱら子どもを生む存在として評価されるようになり、男性から見た女性の性的魅力のポイントも、たくましさや労働能力の高さから、生殖能力や男性への従順さ（すなお・おとなしい）、家族に対するケア能力の高さ（よく気がつく・やさしい）へと移っていく。

このように人間のセクシュアリティは、生殖をベースにもちながらも、その具体的なあり方は歴史的・社会的・文化的に大きく規定されていて、生物学的な視点だけではとうていとらえきれない広がりをもっている。たとえば最近では、男性はより若い女性を好むのが当たり前のことのように思われ、まだ年端もいかぬ未成熟な女性に性的に感応し、盗撮や買春の対象とする行為が多発している。これなどは「生殖」という視点からだけでは説明のつかない男性の性欲求や性行動のあり方で、むしろ今日的な社会現象として考えられなければならない。

3 性の新たな意味・役割

「性」が生殖システムとして生まれたことは、より確実に次の生命を産み出し遺伝子を継承させるという目的にかなった性欲求や性行動のあり方が、それぞれの種において進化してきたことを意味する。厳しい生存環境のもとで雄と雌が助け合って抱卵からヒナの巣立ちまでをおこなわなければならないある種の鳥類において、毎年必ず決まった相手とペアを組んで繁殖する「一夫一婦制」のような固定した関係が見られるのも、そうした進化の結果である。

5) 川村邦光『セクシュアリティの近代』講談社選書メチエ、1996、（現在は『聖家族の誕生』と改題され、ちくま学芸文庫に所収）など参照。

一方、人間もそうであるが、比較的安定した集団（群れ）をつくりそこで生活・繁殖する社会性動物（特に高度なコミュニケーション能力を身につけるようになった動物）の中には、群れの中で個体同士が「性」を媒介に良い関係を築いたり調整したりして、生存と繁殖に必要な他者との確かな協力関係を確保する方向へと「性」を進化させた種もある。そうした種においては、性欲求や性行動が繁殖に直結する内容に限定されず、むしろ生殖とは関係なく思える社会関係的な意味内容や役割を担ったものになっている場合がある。人間のセクシュアリティが生殖という地平をはるかに超えているのも、その延長上にあるものとして理解できるだろう。

「性」を群れの平和的な秩序の構築・維持に（無意識にだが）日常的に多用している動物として有名なのがボノボである。ボノボの性行動は、効率よい生殖のためほとんどの動物が限られた繁殖期にだけ発情して性行動を起こすのに対し、妊娠の可能性がない繁殖期以外にも、また同性同士においてさえも、交尾やそれに類似した行為をおこなう点で特異であり、むしろ人間のそれに近い⁶⁾。

ボノボでは、メス同士でおこなう「ホカホカ」と呼ばれる性器の接触行為やオス同士がおこなう「尻つけ」と呼ばれる行為などが見られるが、生殖としては無意味なこの性的振る舞いが、群れの個体同士が良好な関係を築き保つ上で非常に重要な意味をもっているという。つまり、彼らのそのような性行動は「生殖」のため以上に、むしろ日常的には挨拶やスキンシップ、仲直り、不安の癒しといった、個体どうしの親密な信頼関係の構築や確認、修復、それを通した群れの秩序の維持・回復の役割を担っているのである。このように、「親密な関係性」が社会性動物において「性」が獲得した新たな意味・役割であり、人間のセクシュアリティについて考えるためのポイントもそこにあると思われる。

4 人間の性行動の特徴

人間の性行動の特徴を、ジャレド・ダイヤモンドは次のようにあげている⁷⁾。

- ①長期的な性的ペア関係が維持される
- ②性的パートナーが同時に共同育児のパートナーとなる
- ③他のカップルと近接生活し、テリトリーを共有している
- ④性行為を他人の目から隠れておこなう
- ⑤排卵（受精可能期）のシグナルが無くなっている
- ⑥発情期が消失し、女性は月経サイクルのほぼどの時期でも性的に受容可能である
- ⑦楽しむために性行為をおこなう
- ⑧女性は閉経を迎え繁殖能力が停止する

このような人間に特徴的な性行動の背景には、ヒトの頭（脳）が巨大化し、また二足歩行をおこなうようになったことがあると考えられている。

6) 古市剛史『性の進化、ヒトの進化』朝日選書、1999、など参照。

7) ジャレド・ダイヤモンド『セックスはなぜ楽しいか』草思社、1999、参照。

人間の脳容量は、チンパンジーのそれが約350～400ccであるのに対し、350万年前のアウストラロピテクス（猿人）の約375ccから25万年前のホモサピエンス（現生人類）の約1500ccまで肥大化し、すでに限界値に達していると言われる。また、二足歩行をするようになった人間は、上半身の重みを重力に逆らって支えるために骨盤がお椀状になり、仙骨など骨盤を形成している骨も太くなった結果、チンパンジーと比較しても産道が非常に狭い。人間の胎児は、頭蓋骨をいわば折りたたみ、体をよじらせないと産道を通り抜けることができないまでになっている。そこで人間は、子宮で胎児が十分に成熟し育つまで待つことができず、きわめて未熟な状態での出産を余儀なくされたため、出産後の相当長い期間にわたってほとんどかかりきりに子どもの世話をするが必要になったのである。

生まれてすぐの子どもでも、自分から親にしがみついて移動できるニホンザルやチンパンジーの場合、子育ては雌が時に群れの雌たちの手も借りながらおこない、個別の母子への雄の子育て参加はない。それに、雄も雌も発情期に複数の相手と交尾をするため、生まれた子どもの「父親」がどの雄かはまったく分からない。それと対比して考えると、先に見た人間の性的特徴が、なぜ進化の過程で自然選択されてきたかが推測される。

人間が具体的にどのようにして子育てをしてきたのかは未解明であり、男性の参加についても推測の域を出ないが、目も見えず無力な“未熟児”として生まれる人間の子どもを母親一人で抱きかかえながら育てることは困難で、周囲の協力が不可欠だっただろう⁸⁾。そこで、もしも特定の母子に関心を払い、捕食者から守り、子育てに協力する男性／男性たちの存在があれば、子どもの生存率はそうでない場合よりもかなり高くなることが考えられる。そのためには特定の男女間の結びつき（必ずしも一対一とは限定されず、一対複数、複数対複数という可能性もありうる）と、母子への特別な関心をパートナーとなる男性（たち）が持つ必要があり、女性もそうした行動をとる男性を性選択する傾向が生まれてきたのではないか。そのような歴史の流れのなかで、人間の性行動の特徴がしだいに形作られて来たのではないかとと思われる。

そこで、先に見た人間の性行動の特徴の背景について仮説的に考えてみよう。

①長期的な性的ペア関係の維持

子どもが最低限の自立（乳離れし一人で移動が可能）を果たすまでの間は協力して子育てすることが必要。ただし、その関係は永続的なものではなく、ペア関係が再編されることもある⁹⁾。

②性的パートナーが共同育児のパートナー

性的な関係が単に妊娠のための行為に終わらず、子育て期間を通してのパートナー関係を維持するための繰り返される行為となった。

8) その意味では、親族や地域のネットワークが解体し家族も極小化する中で、家庭という密室で母親一人の子育てを強いられることの多い現代は、人類史においても異例な状態と言えよう。社会的な子育て支援の強化と男性の子育て参加の促進が求められるゆえんである。

9) ここでは「ペア」とされているが、先に述べたように二人一組の閉じられた関係だけなのかについては、判断を保留せざるをえない。

③他のカップルと近接生活しテリトリーを共有

ペア関係を築きつつ、その関係の内部に閉塞することなく、集団の他の諸個体と協力しあうことが生存のために必要である。

④性行為を隠す

性行為を内密な行為とすることで相互の親密感を高め、同時に他者からの性的興味・関心の視線を避けてトラブルを防ぐ必要がある。

⑤排卵のシグナルの消失

いつの性行為が妊娠につながったか分からなくすることで、性関係をもった男性（たち）に自分が生まれた子どもの“父親”かもしれないと思わせる。

⑥発情期の消失

性行為が生殖を直接目的とするより、パートナーとの親密関係を構築・維持することを主な目的として、日常的に繰り返される行為となる。

⑦楽しむための行為

これについては後述したい。

⑧女性の閉経

最低限の子育て期間が過ぎても、子どもが本当に独り立ちするまでにはさらに長い期間のケアが必要である。しかし、それを待っていると女性が生める子どもの数は非常に少ないものとなるし、逆に子どもが自立せぬ間に次の子どもを生むと、両方の子育てに失敗する可能性が出てくる。したがって、ある年齢で子どもを生む能力を失い（閉経）、余力をすでにいる子どもの世話や、さらには次世代の子育てへの協力に注ぐ方が、子や孫の生存により有利に働く¹⁰⁾。

4 親密関係と性的楽しみ

これまで見てきたことから、人間のセクシュアリティは生殖という目的をベースに持ちながらも、親密な関係性（intimate relationship）という次元にその中心的な意味・役割をシフトさせるようになったのではないかと考えられる。

とすれば、人間の性的欲求の核心に来るのは、特定の他者をかけがえのない代替不能な（irreplaceable）パートナーとして互いに認め、「あなたはあなた、私は私」という相互自立性を超えた絆（unification）を求める関係欲求であり、本来は目的であったはずの子ども（生殖）も、親密な関係性の結果（「愛の結晶」）として、そこからまた、関係の絆をさらに維持し強める媒体（「子はかすがい」）として意識されるようになる。

このような親密性（intimacy）の意識を高めまた確認し合うために、人間の性表現、性行為は非常に多様な形態（性文化）をもつようになった。キスは人間に広く見られる性表現であり、その始原については諸説あるが、表皮（外面組織）よりも口唇や舌といった粘

10) 閉経後の女性たちが果たした社会的役割については、「おばあさん仮説 grandmother hypothesis」などとして論じられている。

膜（内面組織）を触れ合わせることで、さらに深い親密性を感じ合うことができることも重要な要素であろう。また顔は、人間の身体部位のなかでもっともその人の人格を代表する部分なので、顔を近づけ触れ合わせるキスは、intimate な（最も内奥での）交わりを感じさせるシンボリックな行為ともなる。

したがって、人間としての性的楽しみ（sexual pleasure）は、個体の身体において引き起こされる生理的反応というより、親密な関係性で結ばれた特別な他者との間で生じる忘我の一体感（ecstasy）であり、またそうした自他一体の関係行為のうちに共に安らぎ満たされることで得られる解放感や幸福感であろう¹¹⁾。

5 性的楽しみの自立化

しかし、特別な他者との親密関係が人間のセクシュアリティの核心にあることと矛盾するようだが、人間セクシュアリティのもう一つの特徴は性的楽しみの自立化にある。ジャレド・ダイヤモンドは、「楽しむための性行為」を人間の性行動の特徴の一つにあげているが、その楽しみの中には、親密な他者との相互行為から得る楽しみだけではなく、現実の人間関係を離れて自立化した性的楽しみも含まれている。その典型的なものが「自慰」（masturbation, onanism）である¹²⁾。

自らの性器を刺激して性的快感を得る自慰は、「真猿類の多くに見られる」が、「1頭だけで飼育している場合やメスがいないとき。また正常な交尾行動を学習していない個体に多く見られる」という¹³⁾。このように、猿類の「自慰」は、通常の性行動が阻害された状況においてもつばらなされるものであるのに対し、人間の自慰は、性的対象者が不在な環境下での代替的な性行為としてもありつつ、そうした状況にない場合でも日常的になされており、猿類のそれとはかなり異質なものである。人間がかなり頻繁に自慰をしていることは、「この1ヶ月間の」と比較的短く限定して「マスターベーション（自慰、オナニー）の回数」をたずねた北村邦夫氏の調査の結果からも見られるとおりで、女性全体の約3割、男性全体の8割以上は月に1回以上「自慰」をしたと回答し、10代と20代女性では約2割、同男性では6～7割が5回以上したと回答している¹⁴⁾。

11) 「erotic」は、今では身体生理的次元での快感を引き起こす刺激という意味合いで一般に使われるが、ギリシャ語の「エロース」は、プラトンが用いたように「イデア」（物事の純粋な本質）への魂の憧憬（回帰欲求）を意味している。つまり、本来あるべきより高次の価値や真実のあり方を求める欲求がエロースであり、人間をより高次なあり方へと誘うものが「erotic」なものということになる。人間のセクシュアリティが関係性を中心としたものになってきたことと重ね合わせると、ここで考えられる「より真実な人間のあり方」とは、個々人がばらばらに切り離され孤立した状態ではなく、プラトンが『饗宴』の中で寓話的に述べている人間の原初形態（男女／女女／男男）のように、人と人との親密関係で分かちがたく結ばれたあり方ということになるだろう。

12) 石川弘義『マスターベーションの歴史』作品社、2001、木本至『オナニーと日本人』インタナル出版、1976、金塚貞文『オナニズムの秩序』みすず書房、1982、山本直英『山本宣治の性教育論』明石書店、1999、など参照。

13) 実験動物学者の松林清明氏談（http://www.zakzak.co.jp/top/200908/t2009082435_all.html）。

人間の自慰と猿類のそれとの違いは、猿類の自慰が性器への刺激による快感という身体レベルの行動に過ぎないのに対し、人間のそれは性的ファンタジー——客体的で静的なイメージというよりも、自分の視点や場面性・物語性をもつ主体的で動態的なイメージの連なり¹⁵⁾——が性欲に主導的な役割を果たしている点である。

人間が、リアルな世界とは別に空想の世界をもつようになったのは、言語の使用が関係していると考えられている。発達心理学者の浜田寿美男氏は、ことばが「〈ここのいま〉にはないもう一つの世界を立ち上げる」として次のように述べている。

「身体がその生身で直接に生きる世界とは別に、ことばがそれだけで独自に開く世界がある。そのことを人は「ことばの宇宙」と呼んできた。もとよりそれは一つの比喩である。ことばがまったく身体の世界からの支えなしに、それだけで成り立つなどということは、本来ありえない。(中略)にもかかわらず、「ことばの宇宙」という言い方は単なる比喩を越えた側面をもつ。なにしろ身体の世界は、その身体のある〈ここのいま〉に縛られ、その身体的位置を基点とする遠近法をまねがれることができない。ところがことばが立ち上げる世界の中では、知らないうちに〈ここのいま〉の自分の身体的位置を抜け出し、視点を移動させて、そのことばの世界のなかに身を移してしまっている。たとえば小説を読みふけると、読んでいる自分がその世界のなかに移り住んでいるかのように錯覚する。そうした錯覚のうえで人はことばの宇宙を楽しみ、またそこに巻き込まれて苦悩する。」¹⁶⁾

人間には、もともと実用的な目的をもっていた欲求や行動が、それ自身の楽しみ（遊び）に転化する傾向がある。スポーツの多くも、競い合いという要素によって促進されつつ、たとえば徒競走のように、獲物を追う・捕食者から逃げる・情報を早く伝えろといった実用目的を離れて自己目的化されたものが多い。競争という要素を抜きにしても、いわゆる食通のように、美味の追求が自己目的化した楽しみになっているようなものもある。したがって人間の「自慰」は、性的な楽しみが「生殖」のみならず「関係」という目的からさえ離れて自己目的化（遊戯化）し、そこに性的ファンタジーという人間ならではの想像世界が深く関わってなされる行為と考えられよう。

14) 北村邦夫「男女の生活と意識に関する web 調査, 2011」(<http://www.yomidr.yomiuri.co.jp/page.jsp?id=53561>)。

なお、日本で初めて女性のセクシャリティについてまとめた調査をおこなったのは、月刊女性雑誌『モア』（集英社、創刊1977）である。1980年と81年の2回にわたり雑誌に掲載したアンケート調査票への回答を読者に呼びかけ、第1回は5422人、第2回（すべて記述式回答）は348人が回答を寄せた。回答者には10代から60代までの女性が含まれているが、雑誌の主な読者層である10代後半から20代が大多数を占める。無作為抽出の調査ではないので、その結果が女性の一般的な傾向を表しているとは言えないが、第1回調査では回答者の88%、第2回調査では92%が「マスターベーションをする」と回答している。なお、この調査の結果と分析は『モア・リポート』（集英社、1983）として刊行されている。

15) 『モア・リポート』では、「自慰」をする時「何かを想像する」と答えた人は自慰経験がある人全体の77%で、「しない」人が19%である。内容的には、実在する相手との性行為を思い浮かべること Alternatively, 非現実的なシーンやストーリーを自由に想像する場合もあるという。

16) 『「私」とは何か—ことばと身体の出会い』講談社選書メチエ、1999、pp. 17-18。

自慰は人間が古くからおこなってきた行為であるが、ユダヤ・キリスト教においては古くから、また近代社会においては道徳や教育、医学の見地から盛んに批判されるようになった。自慰への批判の視点を金塚貞文氏は、①宗教（特にユダヤ・キリスト教）的視点、②道徳的視点、③科学的（医学的）視点に大別している¹⁷⁾。

①宗教的視点からの批判——「罪」としての「自慰」

ユダヤ・キリスト教においては、性行為を「生殖」のために神から与えられたもの（「産めよ、増えよ、地に満ちよ」）としては認めながらも、「楽しみ」の側面については人間の「罪」深さと結びつけて否定的にとらえている¹⁸⁾。したがって、生殖とは無関係の楽しみ目的の行為そのものである自慰は、当然批判の対象となった¹⁹⁾。

②道徳的視点からの批判——「悪徳」としての「自慰」

カント（Kant, 1724-1804）は、人間の人間たる所以（人格性）を、実践理性によって自らの行為を道徳的に厳格に律することと考えた。彼にすれば自慰は、種族保存という性行為の自然な目的を逸脱した不自然な行為として（カントもまた敬虔なキリスト者として、性行為は婚姻契約で結ばれた夫婦間の生殖目的によってのみ正当化されると考えていた）、さらには「動物的傾向性」（衝動的欲求）に身を委ねる非理性的な（人格を毀損する）行為であるとして「悪徳」とみなされた。

③科学的視点からの批判——「病」としての「自慰」

自慰が心身の健康に悪影響をおよぼし、病気の原因となるばかりか自慰に耽る人間を狂人・廃人にしてしまうという非難は、西洋近代において盛んに論じられるようになり、日本でも明治維新以後に紹介され広められることになる。しかし自慰を治療すべき病とする捉え方の背景には、②で見たような道徳的な批判意識があった。つまり、他人の目から隠れた性行動の中でも、特に自分だけの行為である自慰の誘惑に打ち克てるかどうか、その人の正常な自己コントロール（自律）能力の有無が示されるというわけである。そこで自慰の誘惑の克服が特に青少年にとっての重要な道徳的教育的課題とされ²⁰⁾、それに科学的な裏づけを与える役割を担ったのが近代の「性科学

17) 金塚貞文、前掲書、pp 3-23。

18) 「創世記」では、「蛇」に女（イヴ）がそそのかされ、その女（イヴ）に男（アダム）が誘惑されて神の戒めを破る大罪を犯し、楽園（エデン）から追放されたとされている。禁断の実を食べるという大罪を犯した彼らがまずしたのは、「恥部」を隠すことであった。

19) ドイツ語で「自慰」をあらわすオナニー（Onanie）という言葉は、「創世記」に出てくるオナン（Onan）の話に由来する。オナンの行為は「自慰」ではなく「膣外射精」であるが、「生殖」という神の与えた目的を裏切る行為として、中世以降に「自慰」を意味することばとして使われるようになった。

20) 第二次性徴が始まる思春期になると、身体の変化とともに性的な関心や欲求が生まれ、自らを性的存在として意識するようになる。自分や異性の身体の性的部位にも不安と興味を抱きつつ、現実の性行為に先立って性的想像による自己愛撫、つまり自慰を密かに始める者も出てくる。そこに次のような「教育的」警告が発せられる。

「手淫は悪徳である。その害は又既に明らかである。この悪徳から遠ざかる可く、又これに由って起きた総ての障碍はこれ又この悪習慣を廃める事に因って、完全に除去する事の出来る事も自

(sexual science)」である。

このように、自分の内からわき起こってくる性欲求（本能）を理性的に統御できるかどうかでその人の人格（人間性）が問われるとされ、自慰をした者はその後で大きな敗北感と後悔をとまなうよう仕向けられる。こうして自慰の誘惑に主体的に打ち克つ訓練を通して、あるがままの欲求に身を委ねず、あるべき規範（実態はその社会に支配的な規範）によって正しくおのれを律する「健全な自己」の形成が促される。

6 交錯する現実と空想

先に、人間は現実と想像の二つの世界をもつと述べたが、この二つは無関係にあるわけではない。そもそも人間は、まったく経験できないものを想像することはできず、いくら奇想天外な空想をしたつもりでも、しょせんは現実に存在するものの拡大・縮小（巨人・こびと）か変形（口裂け女）か合成（キマイラ）のいずれかでしかない。

性的ファンタジーも同じで、その内容は直接・間接に体験された性的対象物（裸体や性器など）や性関係、性行為をもとにして想像力が創り出した表象や物語である。しかし人間は、自らが想像したものをイメージの世界だけに止めることなく現実化しようとする。たとえば人間は、想像された「あるべき存在」すなわち理想へと「現にある存在」すなわち現実を近づけるため、現実を変形（変革）しようとする。遺伝情報に一方的に縛られない人間の創造力の源の一つは、この想像を現実化しようとする傾向にある。

性的ファンタジーも、自慰では単なるイメージの世界にとどまるが、人間はしばしば現実の他者との性関係に自分が楽しむファンタジーを持ち込もうとする。もし性的パートナーがそのファンタジーを共有し「共に楽しむ」ことができるのなら、それは両者の関係の緊密化＝親密性の強化に貢献する。秘密にすべきものの共有は、共有する者同士の絆を強くするからである。しかし、相手が自分の抱くファンタジーを共有できなければ、共有できないものは自分ひとり（自慰）のものにとどめ、共有できる性的ファンタジーをパートナーとのコミュニケーション（communal＝共有されたものをつくりだす意）を深めて一緒につくり出すしかない。ところが、時に人間は自分の抱くファンタジーを他者に無理強いする。自分の性的ファンタジーを受け入れそれに従った性的振る舞いをパートナーに強いる人（多くは男性が女性に対して）が少なからず存在するのである。

人間にとって想像世界が魅力的なのは、そこでは自分が現実の諸制約から解放された全能の存在となりうるからである。性的ファンタジーのなかでは、現実にはありえない相手や状況を自在に想定して思うがままに振る舞う／振る舞わせることができる。そこで味わう全能感が、一種の癒し効果をもたらすことは事実だろう。しかし、自慰を楽しむだけで

明な事である。（中略）然しこの悪習は年齢のゆかぬ内に早く行えば行いう程、又頻々と又激しく行えば行いう程、その人に悪い影響を与えるものとされている。」（1935年に東京帝国大学学生課が新入生に配布した『学生健康の策』の「手淫について」の項目、山本直英氏の前掲書より）。

こうした動きの背後にある近代の政治権力の分析とからめて性の問題を論じたのが、周知のようにフランスの哲学者ミシェル・フーコー（Michel Foucault, 1926-84, 『性の歴史』）である。

はなく、現実の相手との性関係においてそうした癒しを一方的に求めることは、パートナーをストレス解消の単なる道具として利用することであり、ストーカーや盗撮、痴漢といった犯罪（いずれの行為も、そのポイントは「全能感」にある）にもつながる可能性がある。

関係というのは一方通行ではない。相手と向き合ったとき、自分は相手を「見る存在」であると同時に、相手から「見られる」存在である。自分が相手のどこをどんな風に見ているか、相手からも見られている。だから、自分の内心を見透かしているかもしれない相手のまなざしは、私を緊張させる。「のぞき（peep）」という行為（「盗撮」はその現代版）に人間が興奮を覚えるのは、自分は見られずして一方的に相手を見ているというシチュエーションがもたらす安心感と優越感（総じて言えば全能感）のゆえである。

関係の相互性（見る／見られる）がもたらす緊張は、相手と自分との距離が遠い（疎遠な）ほど、つまり「共有されたもの」が少ないほど大きくなる。互いを知り合い相互理解が進むほど、「共有されたもの」が増えて親密さが深まるにつれ、相手のまなざしから覚える緊張感は和らぎ、相手の視線に自分の秘密の身体部分をも安心してさらせるようになる²¹⁾。

7 親 密 性

動物行動学者デズモンド・モリス（Desmond Morris, 1928-）は、『ふれあい』（原題は“Intimate Behaviour”＝親密な振る舞い）において、「最初の魅惑から最終的な信頼にいたる（中略）親密性を増していく長い複雑なプロセス」として、「目から身体」に始まり「性器から性器」に至る12の段階をあげている。もしもこうした親密関係を築く不安と期待に満ちた駆け引きのプロセスが飛び越^{スキップ}され、性行為が自慰だけに自閉したり、「インスタントセックス」のようなその場限りの消費的な癒やし行為になってしまえば、性の楽しみも非常に底の浅いものになってしまうだろう。

「人間とは何か？」という問いに対し、「性を楽しむ動物である」と答えることができるだろうが、そこで言われる性の楽しみとはまず第一に、特別な親密関係にある人間たちの〈共に／間で〉の楽しみである。モリスは、そうした親密関係を自体が人間に特有であると述べている²²⁾。

サルにおいては母子関係でのみ親密性の絆が存在するが、大人同士でそうした関係は決して成立しない。一般に動物の性関係（交尾）は、親密性とは関係なくおこなわれる本能的な生殖行為にすぎないし、ボノボにおいても相手を限定した特別な親密関係で結ばれることはない。

しかし人間においては、母子密着の乳児期から独立欲求（自我欲求）が芽生える幼児期、親から離れて自立しようとする思春期を経て、成年期に入って再び、ただし親とは異なる（多くの^{マジョリティ}人においては異性の）相手を対象とする親密性の関係欲求が強まり、「性」が取り

21) 相手の視線に裸身をさらしても平気でいられるもう一つの場合は、その視線をそもそも「人間のまなざし」とは見なさない場合である。

22) デズモンド・モリス『ふれあい』平凡社ライブラリー、1993、p. 104。

持つオトナ同士の全的な親密関係が形成される。

親密性の概念について家族心理学者の佐藤悦子氏は、「親密性 (intimacy) という英語は接触し、認められ、評価されたところで生ずる快感を指し示している。つまり孤独と呼ばれる飢餓状態が満たされた場合を指示することばである。(中略) さらにこのことばは、二人以上の人間が相互作用をすることで、初めて成就^{じょうじゆ}される状態を示している。単に性行為によってオーガズムを得られたとか、薬物によって興奮した状態を言い表すことばではない」と説明し、「他者を必要とし、他者に必要とされ、そのことで他者とつながる(共生する)人間の基本的なあり方は、言いかえれば親密性 (intimacy) を成就するためのプロセスでもある。そうして性愛 (sexuality) は、親密性を成就するために必要な能力であり、営みなのである」と述べている²³⁾。

このように、性によって媒介された親密な人と人とのつながりは、親子関係と共に、「人間^{じんかん}」としての人間にとって原関係^{げんかん}とでも言うべきものである。大人になって築かれるこの親密関係は、安定した静止状態というより、いわば引力と斥力とが絶えず働く動的^{ダイナミック}な人間関係のプロセスとしてあるだろう。

親密関係をめぐる動的过程を考える場合、社会学者のアンソニー・ギデンズ (Anthony Giddens, 1938-) が提起する次のような歴史的変動の視点は重要であろう²⁴⁾。「今日、女性は、歴史上初めて男性との対等な関係を要求している」と述べるギデンズは、「対等な人間どうしによる人格的きずなの交流」への親密な関係性の変容は、「対人関係の領域の掛け値無しの民主化という意味合い」ともない、「近代の諸制度全体を崩壊させるような影響力をもまた、おそらくもちうる」と言う。しかしながら、母子の一体性と分離に由来する分裂した女性観 (全面的に自分を受け入れ欲求をかなえてくれる女性への感情的依存と、自分を突き放し自立を促す女性への不安や怒り) を抱える男性は、女性との対等な関係を望むと言いつつ、女性の対等な立場に拒否反応を示す。こうした男性のセクシュアリティのゆらぎといらだちを背景に、男性の性欲求・性行動に喜んで答え恍惚状態に達する女性 (欲望の対象であっても愛情の対象ではない) の姿を繰り返し描くポルノグラフィが爆発的に増加したり、女性の性的支配欲求と自分の性的能力に対する不安の板挟みから、女性の共犯関係の弱まりに対する破壊的反應としての男性の暴力が女性に向けられる。したがって男性は、親密な関係性の問題から逃避するのではなく、自立した一個人として女性との関係を育んでいくべき課題を負っているものであり、こうした性の民主制 (性の解放) は、セクシュアリティだけでなく、さまざまな人間関係のあり方にも根本的な形で影響を及ぼしていくだろう、という²⁵⁾。

23) 佐藤悦子「性愛と人と人との間の親密さ」、『現代のエスプリ』353号、1996、所収。

24) アンソニー・ギデンズ『親密性の変容』而立書房、1995。

25) 「男性学」(Men's Studies) を提唱している伊藤公雄氏は、『男性学入門』(作品社、1996) のなかで、アメリカの社会学者で『母親業の再生産—性差別の心理・社会的基盤』の著者であるナンシー・チョドロウ (Nancy Chodorow) の説を紹介しながら、男性が抱きがちな「不安の心理」と「支配の欲求」を説明している。

8 ポルノグラフィと親密関係

ギデンズも指摘しているように、「不安の心理」を背景にもつ男性の「支配欲求」をイメージの世界で肯定的に表現し、それを強化・固定化する役割を果たしているのが、アダルトビデオ（AV）などのポルノ作品である。

ポルノ・買春問題研究会のアンケート調査（男性のみ対象、同会『論文・資料集』vol. 4, 2007）によると、「これまで何らかのポルノ（小説や漫画なども含む）を視聴したことがある」と回答した男性は91%で、理由の80.3%が「マスターベーション」（自慰）のためである（複数回答、他に「好奇心」「暇つぶし」が各々約44%、「性行為の参考」が23.4%）。さらに、自分が見たポルノに描かれた行為のうち、「レイプ、痴漢、セクハラ、肉体的暴力、道具などの虐待的使用、子供への性行為、監禁、そのほか相手が嫌がる性行為の強要など」をしたこと、あるいはしたいと思ったことがあるかとの質問には、3%が「実際にした」、14%が「してみたいと思った」と回答している。

このように、ポルノ作品の描くイメージ（その中には、「男らしさ」の「全能感」をきわめて粗野な形で表現した「暴力的ないし強制的な性行為」を含む）が、自慰の場にとどまらない傾向にあることは、1999年にNHKがおこなった全国調査（『データブック NHK 日本人の性行動・性意識』日本放送出版協会、2002）の結果からもうかがえる。それによると、AVやレディースコミックなどに描かれているセックスを「真似してみたことがある」「したいと思った」と回答した人は、AVなどを見た経験のある男性の59.5%にものぼっている（女性では23.5%）。ポルノが振りまく「男らしさ」のイメージに最も影響を受けやすいのが、^{アイデンティティ・クライシス}「自我同一性危機」の渦中にある若者であることは想像に難くない。また、いわゆる「性風俗営業」も、さまざまに工夫を凝らして男性の性的ファンタジーをつくり出し煽り立て、それを演技的・近似的に体験させるサービスを提供している。

想像世界がこのように歪曲をともないつつ肥大化させられる一方で、現実世界での親密関係はどうなっているのだろうか。国立社会保障・人口問題研究所の「第14回出生動向基本調査」²⁶⁾によると、18歳から34歳までの未婚者で「交際している異性はいない」と回答した人は男性で61.4%（前回2005年は52.5%）、女性で49.5%（同44.7%）にものぼり、「とくに異性との交際を望んでいない」人は男性で27.6%、女性で22.6%あった。また、性関係をもつことのハードルが年々低下しているという印象とはうらはらに、上記年齢層の未婚者で「これまでに異性と性交渉をもったことがない」人が男性で36.2%（前回31.9%）、女性では38.7%（同36.3%）と増加傾向に転じている。楽しみとしての性が商業的な娯楽（エンターテインメント）へと吸収され、現実の人間関係の親密性の絆としては機能不全に陥っている現状がうかがえる。北村邦夫氏らの「男女の生活と意識に関する調査」²⁷⁾で、「セックス（性交渉）をすることに関心がない」「嫌悪している」という人がほ

26) 調査実施は2010年で2011年発表、18歳～50歳未満の未婚者を対象、有効回答10581人。http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou14_s/doukou14_s.asp/

27) 「第5回男女の生活と意識に関する調査」結果報告、財団法人・日本性教育協会「現代性教育研究

ばすべての年齢層で増加し（2008年→2010年）、16歳～19歳では男性の36.1%、女性の58.5%がそう答えているのもその現れだろう。

9 疎外された性—売春

楽しみとしての性は、関係の視点から、①親密な他者と楽しみを共有する性と、②自分が楽しむ性に大きく分けることができる。そして②はさらに、(1)自分独りで楽しむ性（自慰）と、(2)他者を利用して自分が楽しむ性に分けることができる。他者を利用して楽しむ性の中には、盗撮などの行為も含まれるが、以下では売買春について考えてみる。

ここでは「売春」を、「お金などの対価を得ることを主目的としたサービスの提供として、対価を支払う相手（あるいはそこから依頼された相手）と身体接触を伴う性行為をおこなうこと」とし、そのサービスを買う行為を「^{かいしゆん}買春」としておく。この定義では、たとえば恋人間でプレゼントのやり取りが伴う性行為をしても、もちろん売買春には当たらないし、ポルノ映画などに出演したり作品を購入したりすることも同様である。一方、行為の内容を性器性交には限定せず「身体接触を伴う性行為」としているの、手や口など性器以外の身体部位を用いた性行為も売買春に含める。また、その行為が常習的職業的に行われているかどうかは問わないので、いわゆる「援助交際」のような素人による一時的な行為であっても、ここでは売春に含める。ただし、暴力や債務によって強要された売春や、たとえ形の上の自発性はあっても、貧困から生活のためにやむを得ず行う売春、おとなの判断力や行動力をまだ持っていない未成年者の売春は社会問題として解決がはからなければならないものなので、以下の売春は成人による自発的なそれを念頭に置いて考えている（ただし、内容としては未成年者の「援助交際」にも関わってくる）。

まず、売る側からすると、売春は対価を得るための経済行為であって、金銭を得る楽しみはあっても、性を楽しむという目的は（少なくとも主たるものとしては）そこにはない。サービスには自分も楽しんでいるかのような演技が含まれるかもしれないが、「〈福澤諭吉〉（お札）と思えばいい」とか「何本ヌク」と言われるように、相手を非人格視したり、性行為を単なるモノの処理作業と見なすことで、身体的疲労や売春行為につきまとう心理的負担の軽減がはかられる。したがって、売春のはらむ問題とは、「親密な他者と共に楽しむ関係行為」または「性的ファンタジーを単独で主体的に楽しむ行為」である楽しみとしての性を、いわば「目的外使用」してウリに出すことの問題である。

かつて人間には、同じ人間から自由を奪って奴隷として売り買いし、主人の意志の下に奉仕労働させていた時代がある（今日においてもなお非合法には人身売買が存在している）。しかし近代社会は、人間の自由を奪うことも売り渡すこともできない人間の尊厳に関わる基本的な権利すなわち人権（human rights）であるとし、奴隷制度を非合法化した。

ということは、人間が自らの能力や行為を商品として売る場合に、それがたとえ自由意

志によるものであったとしても一定の制約があるということである。たとえば自らの労働力を、仕事の内容と労働条件を限定して、合意により商品として売る（雇用される）ことはできるが、無条件・無際限に雇用主に労働力の使用権を売り渡すことはできないし、してはならない。また、仕事の内容と条件が限定され売買双方の合意があったとしても、従事する労働それ自体が売る側の心身や尊厳を傷つけ損なうおその強い場合も、その商品化は不法とされるべきだろう。

売春は「どこにも被害者がいない」とか「別に減るものはない」とよく言われる。では本当に売春という行為は、成人が自由意志で行うのであれば、「売る側の心身や尊厳を（本人に自覚があるかどうかは別として）傷つけ損なうおその強い」ものではないのだろうか。

これまで見てきたように、人間のセクシュアリティは生殖という当初の目的から、特別に親密な関係性の構築・確認・強化という目的をもつ行為へと進化してきた。そのために人間においては、内密に共有される「性の楽しみ」という要素が親密関係の絆として重要な意味をもつようになった。したがって売春のはらむ問題は、さきほど「目的外使用」と言ったように、「性」を介した人と人との関係を、本来の目的を逸脱して別の目的を実現する手段にしてしまうことが引き起こす問題である。つまり売春者は、買春者の欲望をその人の人間性から切り離しモノのように「処理」することで自分の経済的欲求を満たすのだが、逆に言えばそれは、売春者が自身の性的な身体や行為を自分の人間性から切り離し、相手の^{ひとりよがり}独善的な性の楽しみの単なる道具としてお金と引き替えに提供することに他ならない。したがって売春は、「相手の非人格化＝道具化」と「自分自身の非人格化＝道具化」という二重の非人格化＝道具化の上に成り立つ行為である。「相手の非人格化 即 自分の非人格化」という構造は、買春者の側から見ても同じことである。

どこの誰とも分からぬ相手と密室で行われることが一般的な売春は（特に派遣型売春においては）、暴力や性犯罪の被害にあったり、またウィルスで汚染された相手の体液に直接触れることで性感染症に罹患する可能性も高く、非常に危険な行為である。しかし、「相手を自分の／自分を相手の」欲望の単なる道具とすることから人間として受けるダメージは、ある意味でそれ以上に大きいのではないか。日雇い派遣の若者に密着したドキュメンタリ番組で、「今の生活で何が一番辛いですか？」との質問に、「どの職場に行っても、名前で呼ばれることがないのが辛い……こんな生活していると、やっぱり病みますよね……」と吐き出すように答えていた印象的なシーンがある。名前で呼ばれない、つまりその場限りで使い捨てられる単なる労働力（モノ）としてしか自分が見られず、「人格」として認められないことが人間にとっては「一番辛いこと」であり、それが自己否定的な感情となって自分に向かい、心を荒廃させ病ませる——そうした人間性の毀損が売春によってもたらされる可能性は非常に高いのではないか。売春は、成人が自発的にする自由な行為であったとしても、決して「誰も傷つけず、何も減らすことのない」無害有益な行為などではないだろう。

これまで、経済行為としての売春を見てきた。しかし最近では、お金以外の目的で一時

的あるいは非常習的に売春する若者（特に若い女性）が増えているという。AV に出演したり、売春でなくても特に親密でもない相手からの求めに応じて簡単に性行為をする場合も、そこには同じ欲求が働いていると思われる。それは、「自分を認めてほしい」「自己肯定感を得たい」「孤独感や不安感を紛らわせたい」という欲求である²⁸⁾。

元セックスワーカー²⁹⁾の鈴木水南子氏は、村瀬幸浩氏との対談「買春と売春から“人間と性”を考える」の中で、過去の自分を次のように振り返っている³⁰⁾。

鈴木 私が入った一番の原因はやはりお金がいいということですね。これが時給千円ならば我慢できないと思う。

村瀬 触れてもらう安心感、あるいは感謝してもらおう嬉しさ、そういうことを通じて自分が受ける自己肯定感、そういうことが要素としてありませんか？

鈴木 私はそれもまた、すごく大きいですね。とくに、女性の価値というのは男性に性的に欲情してもらうことだという思い込みが私はとても強かったから。

私に限らず女性一般に対して、男の人に性的に魅力的だと思われる女であれ、というメッセージは強いと思いますよ。胸が大きいほうがいいのかウエストや足首が締まっていて、お尻がほどほどがいいとか、というメッセージを私たちは頻繁にひんばんに浴びていますね。脇毛やすね毛も剃らなきゃいけないとか、男性のための女性身体改造講座みたいなメッセージ。そういうのにさんざんさらされてきて、風俗の中に一步入れば、客はたいてい誉めてくれるんですね。スタイルがいいだのきれいだのと。そんなことあまり外の世界で言われたことはないから、もう嬉しくて嬉しくて、本当に自信をつけてくれたと思う。

〔危険と隣り合わせの店に居続けたのは〕そこで称賛されることで得られる自己肯定感を逃したくないというのがあった。個室の中ではスターでありアイドルじゃないですか。自分の人生で唯一自分の思い通りになるのは、性的な部分を使うことだけで、他のことは決して自分の自由にはならないという無力感があったのかな。

同様の内容は、小野一光『セックス・ワーカー』（講談社文庫、2001）など、当事者へのインタビューの多くで語られている。またそれは、ヴィクトル・フランクルの言う「実

28) 『『援助交際』“欠落”を埋めるセックス』（『毎日新聞』2004.8.3., 抜粋）

実家を離れ、東京都内で1人暮らしをしていた大学2年生の時。ミカは週1回はチャットメールのやりとりをし、その中で、「よさそうだ」と思った男にメールで誘いをかけ、月2回ほど会い、セックスをした。「男たちを好きなように操っている実感がすごく楽しかった。それと、『かわいいね』といわれると、『承認された』という満足感があった」とミカは言う。

ミカは、小学生の時から男子に体に興味を持たれ、胸を触られるといった不愉快な体験を何度かしている。そのため、「私は首から下しか見られていない」と、自分の体に劣等感を持った。そのゆがみに加え、ミカの心を覆っていたのは、「人から見捨てられるのではないか」という不安だった。だから、『援助交際』で男たちから「かわいいね」と言われ、抱かれていると「首から下だけじゃなくて、私を認めてくれている」と感じ、自分の体への劣等感や「見捨てられるかもしれない」という欠落した感じを埋め合わせることができた、と言う。

29) 性産業に従事する人びとを、他の産業の従事者と等しい「労働者（ワーカー）」として認めるべきだという主張（セックスワーク論）に基づいた呼称。

30) 鈴木水南子・村瀬幸浩・角田由紀子・草野いずみ『買春と売春と性の教育』十月舎、2001。

存的空虚」を「性」によって埋めようとする性依存症者の次のような証言内容³¹⁾とも通じるものである。

「性」は「生きる」ことの根源的な象徴だ。私は生活に失望していたために、いきいきと生きている感覚を失い、私の心は「性的な感覚」を駆使することで、「私は生きている」という感覚を取り戻そうとしていた。

自分の真の欲求がどうしても満たされず生活に失望すると、自分の心は何とかして「私はいきいきと生きている」という感覚を渴望する。その感覚を一瞬でも得るために嫌な現実からほんの一時でも逃れるために、酒、薬物などの物質や、セックス、ショッピング、食べ物、恋愛などの行動に手を伸ばすことで、「生き生きとしている、ハイになれる」感覚を得ようとする。

それらの物質や行動は、二次的欲求だ。二次的欲求は、満たされない真の欲求のすり替わりにすぎないので、たとえ満たされてもきりがいいから自己破滅への道^{たど}を辿る。

このように、自己肯定感の欠落や満たされぬ自己承認欲求、意味ある生を生き得ているという感覚の欠如を、人間的生の根源にあり、人と人との関係の絆である性行為で埋めようとするのは、ある意味でよく理解できることである。しかし、「買春とは自分の手を女の体に代えただけの自慰行為」とも言われるように、たとえ自分を買ったり利用したりする相手から誉められちやほやされようとも、それは自分好みの欲望充足の便利な手段や儲けるための商売道具として価値を認められているだけで、かけがえのない人間として尊重されその存在が大切にされているわけではない。その根本的なすれ違いのゆえに、自己肯定幻想の対価に捧げられた性行為は、売春者自身の人間性を徐々にすり減らせ、「自己破滅への道」に導くことになる。売春は、決して「被害者のいない」「何も減るものがない」行為ではなく、当事者のいわば自傷行為と言うべきものではないだろうか³²⁾。

31) 相馬真由美『セックス依存症の記録』朱鳥社、2005。

32) 中村淳彦氏は『売春未満』というルポルタージュ（宝島社、2011、pp.24-25）で、次のような少女の声を紹介している。

相手がどんな人だったのか、お金を貰ったらすぐに忘れてしまってほとんど覚えていない。自分のカラダやセックスはお金を得るための手段、ただそれだけだった。「なんかいろいろどうでもよかったのは、援助交際を始めてからかな。友達とかみんな恋愛とかエッチとか真剣に話しているけど、そんなことはどうでもいいことだと思っていました」

ちなみに中村氏によれば、素人女性が大量にAVや「援助交際」に関わるようになり、並みやそれ以下の容姿ではもはやAV女優としての成功も高い売値での売春もできなくなってきているなかで、かつてのようにハダカや性サービスを売ることを隠すべき恥ずかしいこととは考えず、むしろ自分の才能として誇らしくさえ思う「勝ち組」女性が増えてきているという。その背景を彼は次のように書いている。

2006年から決定的に変貌した、あの感覚はなんなのだろうか——。おそらく社会全体で加速度的に進んでいる階層化が関係している。一生懸命に働いても生活すらできない貧困層が登場したことによって、女性の最後の手段を売ることは恥ずかしいことでもなんでもなく、売れるものがあるのは才能、それを誰かが批判できるような社会状況ではなくなった。（中略）AV女優や風俗嬢が、自分が売れるものを売る選択——現実には就職できない同級生より、中退してフリーターをしている友達より、離婚して貧困の中で生きる母親より、リストラされて働かない父親より、今が充実している私の方がマシ、誰かから必要とされて社会貢献をしている——現在の社会状況を

10 疎外された性—買春

まず、「買う」という行為について考えてみる。買うとは、カネと引き替えにあるモノの所有権あるいは使用権を獲得する行為、つまり、恒久的無条件的（所有権）にせよ一時的条件的（使用権）にせよ、そのモノを自分の意志に従わせる権利（支配権）を得ることである。さらに言えば、買うこと自体がすでに自分の権力（経済権力）の行使であり、またそれが他者によって承認される（売り手の ^{へりくだ} 遜った態度とともに商品が引き渡される）ことである。買うという行為が嗜癖³³⁾ になりうる（買い物依存症）のは、このように買うことで自分の力（power）が実感され、自己肯定感がもたらされるからである。買い物依存者が、買った商品には手もつけずに際限もなく買い続けるケースが多いのは、それが消費欲求（使いたいとの欲求）にもとづく行為ではなく、買うという行為そのものへの依存であることを示している。

買春とは、対価（カネ）を払って相手の身体の性的使用権を買う行為である。それは上に見たように、まず買うという行為そのものにおいて、さらに買ったモノを自分が自由に使用する（買春の場合は、相手に自分に対して性的に ^{サービス} 奉仕させる）ことにおいて、二重の自己肯定感・優越感を買春者にもたらす。特に人間の性行為というものは本来、人格性と切り離せない行為であるために、売春者が売る性行為が人格性を脱落させた単なる形式的行為（作業）であるにもかかわらず、買う側は「人」を意のままに支配しているかのような、つまり人を支配する力を自分がもっているかのような妄想を抱くことができる。

ここでやはり、売買春においては売る側は圧倒的に女性であり、買う側は男性であるという理由について考えておかなければならない。そこには、経済社会における男性優位（一般に男性の方が女性より多くの経済的手段をもっている）や、男女におけるセクシュアリティの違いが関係しているだろう。後者については、いつでもどんな相手とでも性行為することに対する生理的な困難（性的不能の可能性）は男性の方が大きいことが、男性が「売る」側に立つことの難しさの理由としてまずある。さらにまた、子どもを確実に育て上げるためには、信頼の絆で結ばれたパートナーの協力を必要とし、その絆を育むために「性」が親密な関係行為として進化したと想定される歴史的背景を考えると、性行為を楽しむことと相手との人格的関係とを切り離さない傾向は男性より女性の方が強く³⁴⁾、

眺めていると、当然芽生えてくる意識である。（中略）格差，リストラ，貧困——社会が混乱する現在，その女性たちを大切に思っている親や彼氏でさえ，カラダを売ることを辞めさせる言葉を持っていない。（前掲書，pp 7-9）

- 33) 嗜癖（addiction）とは「病的な依存」を表現する概念で、それ自体は正常で自分にとって好ましい行為（たとえば「性行為をする」）に自己コントロールが困難なまでにとらわれ、強迫的に（obsessionally）それを繰り返してしまう（性嗜癖＝性依存症）ことを言う。
- 34) 逆に言えば、男性は女性より性行為と人間関係とを切り離しやすい傾向をもつ。つまり男性のセクシュアリティの方が疎外された形態に陥りやすいことになる。だからといってそれを男性の本性と決めつけ、買春を当然視するのは明らかに間違いである。むしろそこには、男性が権力を握る社会の性制度・性文化がつくり出した男らしさのあり方（精力絶倫や性体験の多さを「男の値打ち」と

買春という行為になじめない（というより嫌悪する）女性が多いことが、女性が「買う」側に立つことの難しさとしてあるだろう。

日本でどれほどの男性が買春をしているのか確かなデータはないが、木原正博氏らが厚生労働省の研究班としておこなった「日本人の HIV/AIDS 関連知識、性行動、性意識についての全国調査」（1999, <http://idsc.nih.go.jp/iasr/21/245/dj2452.html>）によると、過去1年間に売買春を経験した男性は13.6%であったという。調査時期は少し古いが1989～1992年に欧米諸国でなされた同様の調査結果と比較すると、スペインが11.0%と高い以外は、ノルウェー1.8%、フランス1.1%、オランダ2.8%、アメリカ0.3%、イギリス0.6%と日本男性の買春率が著しく高いことが分かる³⁵⁾。

売春する女性についてはいくつものルポルタージュや本人の手記が出ているが、買春する男性のそれは非常に少ない。次にあげるのは、吉岡隆・高島克子編『性依存—その理解と回復』（中央法規，2001）に掲載されている「本人の手記」から、依存症の治療を受けている男性が性行為や買春体験について語っている部分である。

- ①私は気が小さくて、「ノー」と言えません。「ノー」と言う人と人から嫌われる、見捨てられるという不安をいつももっています。最後はだれかが助けてくれると思って、人に（特に親に）依存し、精神的な自立ができていません。母親からの影響か、女性が怖くて仕方ありません。お金で女性を買うことで女性に対して優越感をもつことができます。本当はセックスなんて好きではありません。セックスしている間はいつも冷めていて、なんでこんなことやっているんだと思っていました。（39歳）
- ②結婚生活8年目のころ、3人目の子どもが生まれた後くらいから、妻が性生活を拒否するようになった。妻に対して、今までだれに対しても感じたことのない激しい怒りを感じた。（中略）僕が甘えて彼女が僕を受け入れるという関係はなくなり、妻は性交を拒否することで強くなった。妻は人格が変わったと思った。セックスは僕が妻に優位に立てる武器だったし、僕の自信を回復する手段だったので、しつこく関係を求めたが、拒否された。（中略）テレクラ通いが始まった。そして理想の愛人を見つけた。彼女はすごく寂しがっていたので、僕が電話をするととても喜んだ。僕の声にすごく喜ぶ女性がいることで、男の自信を回復した。一日に何度も電話した。（中略）底つきは4回目に会ったときだった。彼女が帰ったホ

して自慢するような）がより大きく影響しているだろう（ジェンダー規範からすれば、女性の性的積極性や性体験の多さは、逆に「女の値打ち」を下げることになる）。

35) 社会実情データ図録, <http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/2263.html/>。

参考までに、世界最大のコンドームメーカー、デュレックス（Durex）社が市場・世論調査会社を使っておこなった性生活の世界的実態調査「Sexual Wellbeing Global Survey 2003」によると、「これまでお金を払ってセックスしたことがあるか（Have you ever paid for sex?）」という質問項目（回答者は男女ともで、売買春の区別はしていない）で、スウェーデン3%、ベルギー4%、フランス・ドイツ・オランダ・イギリス各6%、スペイン9%、イタリア・デンマーク・アメリカ各10%（世界平均、11%）に対して、ベトナム34%、香港25%、タイ24%、中国22%、シンガポール18%、マレーシア・インド各17%とアジア諸国は軒並み高い割合を示している（この年の調査対象に日本は入っていない）。

テルの部屋に一人が残っていた。いすに座っていた。強い疲労感。脱力感。寂しさ。「もう、やめよう」。「僕のみじめさは、妻の責任じゃない。僕のみじめさは、自分の責任だ」(49歳)

このように、性行為・性関係を女性に対する自分の優位を感じる手段とすることで、見捨てられ不安や自信の欠如といった自己否定的感情を紛らわせようとしながらも、結果として妻との関係を壊してしまったり、一時しのぎの際限ない性行為のくり返しにかえって虚しさをつのらせ、この男性たちは依存症治療の門を叩くことになった。

あっけらかんと買春したり、女性を一時の慰みものにして恥じない男性も確かにいる。しかし、そのような疎外された形態に陥りやすい男のセクシュアリティの弱さに気づき、それに向き合って克服しようとする男性もまた確かにいる。その一人である谷口和憲氏は『性を買う男』(パンドラ/現代書館, 1997)で、かつての自分の買春体験(22歳で初めて買春し、32歳で脱買春を決意)を次のように回想している。

ポン引きが出ていくと、彼女は布団に横になった。私は彼女の上におおいかぶさった。キスをしようすると彼女は顔を背けた。彼女は手で押し返したり、具体的に拒否はしなかったが、耐えていたのがわかった。本当は拒否したいのだ。それが明らかに体全体から伝わってきた。(中略)これは強姦だった。明らかに、私は強姦の加害者だった。彼女は金を受け取ることで、私から強姦されるのを我慢していたのだ。(中略)私は目をつぶり、マスターベーションのときに見るポルノ・シーンを思い出して自分を興奮させていた。「石」のように硬直した彼女を見ていても性欲が起きなかったからだ。彼女がそのようにしていたのは、それが、彼女にとって最後のぎりぎりの抵抗だったからに違いない。だから、この買春は、私にとってはマスターベーションであったが、実際は強姦だった。(中略)射精はたんなる排出でしかなかった。ビルの地下室の煎餅(せんべい)布団の上で、強姦に耐える女性に対して、精液を絞り出すように射精した。全身から力が抜け落ちたあとで、自分の白い精液が入ったコンドームを見て吐き気がした。私は自分という存在に吐き気を催した。(pp. 24-25)

11 ドメスティックバイオレンス (DV)

Domestic Violence を直訳すれば「家庭内暴力」となる。しかし、1980年代に「家庭内暴力」として大きな社会問題となったのは、思春期の子どもへの親に対する暴力であった。その時代にも、親からの子どもへの暴力や夫からの妻への暴力もあったはずなのであるが、それは現在ほど問題とされなかった。件数が少なかったというより、親から子への暴力は「しつけ」という名のもとに正当化され、夫から妻への暴力は「よくあること」「犬も食わない」として問題にもされなかったという方が事実に近いであろう。そうした経緯もあって、近年になって大きく問題とされるようになった親から子への暴力は「児童(子ども)虐待」、夫婦(男女)間の暴力は「DV(ドメスティックバイオレンス)」と呼ばれる。

2007年に改正されたいわゆる「DV防止法」(「配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護に関する法律」)は、法律の名称からも明らかなように、①取り扱うのが「配偶者(夫婦)」間における暴力(事実上の「配偶者」や、離婚後の元「配偶者」も含む)に限られ

ていること、②暴力の内容として、「言動」とも書かれてはいるが、主には殴る蹴るといった「身体に対する攻撃」を想定していること、③DVと認定される攻撃の程度として「生命または身体に危害を及ぼすもの」と、生命の危険かそれに近い非常に深刻な暴力を示唆していること、といった問題をはらんでいる。つまり、①については、配偶者間のそれに劣らず深刻な、婚姻関係にない恋人同士の間の暴力は対象とされず、②については、ことばの暴力や身体を傷つけずにする脅し、性暴力や妊娠または中絶の強要などの暴力は軽視されるおそれがあり、③については、大けがをするなど暴力がエスカレートしない段階では「まだその程度」と見過ごされてしまうこともある。

内閣府男女共同参画局がおこなった「男女間における暴力にかんする調査（平成23年度調査、http://www.gender.go.jp/e-vaw/chousa/h24_boryoku_cyousa.html）によると、「身体的暴行」「心理的攻撃」「性的強要」のいずれかについて配偶者から被害をうけたことがある人（男女合わせて）は26.2%（「何度もあった」7.3%+「1、2度あった」18.9%）で、それぞれの行為についての被害体験は、「身体的暴行」が20.1%（4.1+16.1）、「心理的攻撃」が14.0%（4.6+9.4）、「性的強要」が9.2%（2.7+6.5）となっている。

男女別に被害体験の有無を見ると、女性では32.9%（10.6+22.3）、男性でも18.3%（3.3+15.0）あり、DVは決して女性だけでなく男性が被害にあうこともあるという認識をもつ必要がある。しかし、全体としては男性が加害者で女性が被害者になるケースが多く、女性の被害体験は3人に1人という高い割合を示している。

配偶者以外の際相手からの暴力は「デートDV」とも呼ばれるが、上記調査で「あった」という人は全体で10.1%、女性では13.7%、男性では5.8%である。性・年齢階級別に見ると、年代が若いほど被害経験が多い傾向にあり、女性の20歳代で23.4%、30歳代で23.8%と2割を越えている。男性では20歳代が11.7%、30歳代が9.7%とほぼ1割前後となっている。さらに、10歳代から20歳代の頃に際相手から被害を受けたことのある人に、その行為によって命の危険を感じたことがあるかを聞いたところ、「感じた」が全体では20.8%（女性23.3%、男性13.7%）もある。

また、被害にあったときに、「どこ（だれ）にも相談しなかった」人が全体では42.6%もある。相談しなかった人の理由（複数回答）としてもっとも多いのは、「相談するほどのことではないと思ったから」の46.4%（女38.0、男58.8）で、次が「自分にも悪いところがあると思ったから」の32.1%（女26.0、男41.2）と、「たいしたことはない」と事態を軽視する傾向や自分を被害者と認識していない傾向が、相談をしない背景にあることが分かる。その他、特に女性に多い理由として「自分さえがまんすれば、なんとかこのままやっていけるといったから」28.0%（男性は14.7%）がある³⁶⁾。

DVという暴力の本質について、アウェアのホームページで次のように簡潔な説明がなされている。

36) デートDVに関する意識や現状については、その防止や加害者の更正に取り組んでいる民間団体アウェア（aware）が2006～2007年に、主に高校生を対象とするデートDV防止プログラムの実施後に「デートDVに関して若者の持つ意識調査」をおこなっている（<http://aware.exblog.jp/12687620/>）。

DVの本質は「力と支配」です。相手を力で支配する、つまり自分の思い通りに相手を動かすことです。相手を支配することが目的です。そのための手段として暴力を含めた力を選択するのです。それは効果があるとわかっているからです。

では、なぜ親密な関係にある者を「力」^{パワー}によって支配しようとするのか。森田ゆり氏は『ドメスティック・バイオレンス』（小学館、2001）で次のように指摘している。

愛する人に頻繁に怒りを爆発させ、いったん怒り出したら止まらなくなってしまう人は、自分自身に対する根深い怒りに苦しむ人です。自分への不満、自分の存在価値を感じられない、自分の抱える寂しさにやりきれなくなる、誰からも必要とされていないとの恐れ、社会的には成功していても、最も身近な人からは見捨てられるのではないかと不安。

怒りの感情とは多くの場合、表面的な仮面に過ぎません。その怒りの仮面の下にはこうした自己への深い悲しみと不安が横たわっています。それをみつめることのできない人は、怒りを他者に爆発させることで、自己をなんとか保とうとします。（中略）自分がコントロールできる人間がそばにすることで、彼は自分の内深くに巣くう不安と悲しみに直面しないですむのです。（pp. 118-119）

親密な他者を思い通りにコントロールすることで自分の力強さ（powerfulness）を自己確認しようとするDV加害者は、実は自分自身が他者から存在価値を認められ必要とされていないのではないかと自分の無力さ（powerlessness）に不安といらだちを抱え、かといってそうした無力な自分と真っ正面から向き合うこともできない二重の無力さを抱えている。だからそうした人は、だれかれなく暴力をふるうわけではなく、自分の親密圏（intimate sphere）にある特別な他者のみをターゲットにし暴力的に支配することで、自分の不安やいらだちを一時的に解消させようとする。

しかし、こうした心理分析的加害者理解には大きな落とし穴もあると、長年DV加害者の更生プログラムに取り組んできた人が指摘していることにも留意せねばならない³⁷⁾。つまり、自尊感情が低く実存的不安を抱えた人の誰もがDV加害者になるわけではないし、自己不安を抱えている人は「援助交際」のところで見たように女性も男性に劣らず多く存在している。しかし、DVの多数は男性から女性に対する暴力という形で表れているのである。したがって問題は、そうした不安を女性に対する「力と支配」という形で表現してもよい、むしろ男の攻撃性や暴力性、押しの強さ（aggressiveness）を「男らしさ」として評価・容認するような個人のそして社会の考え方（gender bias）にあるのである。

たとえば、映画『DV』（中原俊監督、2004）では、最後に、被害者の相談に乗ってきた弁護士の宗方が、逮捕された加害者である夫・昭吾に接見するシーンがあり、宗方自身がかつて妻を自殺に追い込んだDV加害者であったことが明かされる。そこで宗方は、妻を殴らずにはおれなかった昭吾の内面の不安にかつての自分を重ねながら「共感」的に焦点を当て、自殺した自分の妻にも昭吾の妻・泰子と同じように自分と向き合っていたと語る。このシーンを機にそれまでの加害と被害の関係が相対化され、昭吾の不安と暴力

37) ランディ・パンクロフト『DV・虐待加害者の実体を知る』明石書店、2008、参照

の根底には子ども時代に父親から受けた虐待の体験があったことも明かされる。いわゆる「暴力の連鎖」である。ここに至って昭吾は、泰子を周到かつ執拗に追い詰めた加害者というよりも、むしろ親からの暴力によって人間関係の歪んだつくり方を教え込まれ、幼少時の心の傷を抱え込み、自分ではどうすることもできずに暴力を振るってしまう被害者として心理分析的に捉え返されるのである。

しかしバンクロフトは、DV 加害者はむしろこのような見方を意識的かつ巧妙に利用しながら、自分がいかに不安な内面世界を抱えているかをアピールし、妻や恋人の情に訴えて「共感的理解」を要求し、暴力を「どうしようもない」と思わせ、自分の不安を癒やす責任を負わせて逃げられなくさせることがあると指摘する。また、子どものころの虐待体験についても、彼の十数年に及ぶ DV 加害者との関わりを踏まえ、最初にそうした体験が自分の DV 行為の背景にあると主張していた加害者の多くが、実際に被害体験があったのかを具体的に追及すると、そうした事実はなかったことを認めるのだという。したがってバンクロフトは、加害者の内面世界に焦点をあてそれを「共感」的に理解しようとする心理分析的アプローチは効果がないばかりかむしろ被害者にとっては危険であり、DV 加害者を心理カウンセリングで更生させようとするのは不可能であると述べている。DV の加害男性に必要なのは、男性は女性に対して暴力的・支配的にふるまっても許されるのだという間違った、しかし社会（特に男性）においてはいまだに根強くある考え方や価値観であって、加害者の更生はこうした考え方の転換なしには決してありえないのである。

12 人間の多様な「性別」

出生時にまず男（male）か女（female）かと判定されるのは生物学的な性別（sex）で、通常は医師が外性器の形状で判定して出生証明書に記載し、その証明書を添付した両親の出生届にもとづいて戸籍が作成され、公的に定められたものとなる。

もう一つの性別がジェンダー（gender）で、言葉づかいや立ち居振る舞い、服装や髪型、役割意識や規範などでの男らしい（manly）または女らしい（womanly）あり方が、各社会集団において歴史的・文化的・社会的に構成され存在している。

sex も gender も一定の客観性をおびた性別であるのに対して、自分の性別をどのように認知しているかという当事者にとっての主観的な性別が性自認（gender identity）である。大多数の人は、身体的な性別特徴に代表される生物学的な性別とジェンダーとが大きな齟齬なく一致し、その結果、安定した性自認をもつことができている。しかし、中には自分の sex や gender 分類に大きな違和感や嫌悪感をもつ人たちがおり、客観的に認められあるいは割り振られた sex や gender とはまったく逆の性自認をもつ人もある。そうした人たちは、すべての人間は男か女かどちらかに明快に分けられる（はず／べき）という性別二元論の原則からなる社会において非常な生きづらさを感じることになる。自認された性別に身体的特徴を一致させたいと考える場合、医学的には「性同一性障害」（Gender Identity Disorder: GID）と診断される。

もう一つ性別に関係することとして、性指向（sexual orientation）がある。つまり人は、

思春期に「異性」の存在が気になり始めると、自分の性別をあらためて自覚し、気になる相手に対して性別にふさわしく自分を演出しようとする。逆に言えば性自認とは、どの性別の人に性的な関心を抱くかで、振り返って自分の性別が自覚化されるという側面がある。

生物学的な性別は、上述のように外性器の形状で通常は判定され、極めて単純かつ明瞭なものと思われる。大多数においてはそうなのだが、中には非常に難しいケースもある。というのも、人間の性分化の要因とプロセスは非常に複雑だからである。

性分化のもっとも基本的要因は性染色体であるが、配偶子がつくられるときの減数分裂の過程で、通常は「XX」(女)か「XY」(男)である性染色体が「XXY」「XXX」「XYY」などとなれば、性分化がうまくできなかつたり(性器の形成不全や男性器と女性器がともに不完全ながら形成されるなど)、第二性徴が発現しない、異なる性の身体特徴が表れるといった問題が生じることがある(特に染色体を調べない限り、まったく問題が表れない場合も多くある)。性分化のプロセスで生じることした少数者の性別のあり方はインターセックス(intersex)や「性分化疾患」と呼ばれ、一般にはもちろん医師でさえ無理解が多く、当事者や家族が苦しんでいる状況がある³⁸⁾。

「LGBT」とは、Lesbian(レズビアン：女性の同性愛)、Gay(ゲイ：男性の同性愛)、Bisexual(バイセクシュアル：両性愛)、そしてTransgender(トランスジェンダー³⁹⁾：sexやgenderと性自認との不一致を感じている人たちの頭文字で、性的少数者を表現した言葉である。

「性同一性障害」とは、トランスジェンダー(広義)の人のうち、カウンセリングやホルモン投与、性別適合手術などの医学的治療を求める人に対して与えられる診断名であるが、一般には、性別に違和感をもつこと全体を指して「性同一性障害」と呼ぶこともある。性別に違和感をもつ人のあり方は多様で、性器やそれ以外の身体的特徴(乳房、体型、体毛、声など)、服装(メイクやヘアスタイルを含む)、生活スタイルへのこだわりのほか、男女二分そのものへの違和感をもつ人もある⁴⁰⁾。

「性同一性障害」という診断名は、当事者からの自分の性別をめぐる混乱や生きづらさの訴えにもとづく医学的措置の必要から下されたものであるが、「ふつう」(多数者のあり方)とは異なる当事者個人の異常(病気)が原因であるという印象をもたれやすい。しか

38) 性分化疾患や性同一性障害については、「毎日新聞」が「境界を生きる」という特集を2010年から毎年継続的に組んでいる(<http://mainichi.jp/feature/dsd/archive/>)。また、橋本秀雄『男でも女でもない性・完全版—インターセックス(半陰陽)を生きる』(青弓社、2004)などがある。

39) トランスジェンダーとは、広義には身体的にははっきり「男」「女」でありながら、自分の性別に違和感をもつ人の総称であり、狭義には反対のジェンダーとして生きたいと望む人を言う。女性ではなく男性として生きたい人はFTM(Female to Male)、男性ではなく女性として生きたい人はMTFである。その他、広義のトランスジェンダーには、トランスセクシュアル(Transsexual：自分の身体の性的特徴に違和感の強い人)やトランスヴェスタイト(Transvestite)あるいはクロスドレッサー(Cross-dresser：異性装者)など多様なあり方が含まれる。

40) セクシャルマイノリティ教職員ネットワーク『セクシャルマイノリティ』明石書店、2006、第二版、など参照。

し、人間の性別は男か女かとはっきり二分されているのではなく、男と女の両極の間にグラデーションのように無数の中間的なあり方が存在するのがむしろ自然なことなのである。とすれば、にもかかわらず「男か女か」という二者択一しか認めない社会（近代社会になって性別二分の考え方が徹底されてきた）の側に問題があると考えるべきだろう⁴¹⁾。

性指向においても、「典型的な異性愛」と「典型的な同性愛」の間にはまた多くの中間形態がある。人間の性行動について、1万数千人の調査にもとづいて、婚前・婚外性交や同性愛、オーラルセックス、自慰行為など、それまで公に語ることがタブー視されてきたアメリカ人のセクシュアリティの実態を実証的に明らかにしたキンゼイ（Alfred C. Kinsey, 1894-1957）が、性指向の調査で、多様で連続的な人間の性指向を考慮して「異性愛か同性愛」かの二分法ではなく7段階の尺度を設けたことはよく知られている。キンゼイの調査に対しては対象や方法の不備がつとに指摘されるが、それまで予想された以上の人が同性愛もしくは両性愛の傾向や経験をもっていることが明らかになった。にもかかわらず日本では、実感としても経験的にもそれほど多くの同性愛者が身近にいるとは思えない。もちろん性指向はきわめてプライベートな情報で日常の話題にのぼらないこともあるが、同性愛者に対する偏見や同性愛嫌悪（homophobia）が、自分の性指向の隠蔽を暗黙のうちに彼女ら／彼らに強いていることも忘れてはならない⁴²⁾。性「指向」は性「嗜好」とは違い、自分の意志や心がけでなるものではない。誰もが他者を傷つけない限り自分のセクシュアリティを恥じることなく、また他者から否定されることなく、共に生きることのできる社会にしなければならない。

近代社会は、異性愛にもとづく近代家族（夫と妻と子どもたち）を社会の再生産システムの重要な柱と位置づけ、すべての人間を男か女かという二分法でくっきりと分けて、異性愛カップルのみを「夫婦」と公的に認める制度をつくった。そのために、男女二分法になじまない人たちは、嫌悪と排除の対象とされてきた。

そうした同性愛嫌悪の強い国であるアメリカ合衆国で、1960年代の後半、黒人公民権運動などマイノリティの権利運動や市民の権利運動の高まりを受けて、同性愛の当事者たちがカムアウトし、1969年にはサンフランシスコで同性愛自由委員会が結成されるなど、いわゆるゲイ・パワーの運動が始まった。かれらは、ゲイが人間の自然な性指向の一つであると同時に、もう一つのライフスタイルであると主張した。

その後、こうした当事者の運動は世界中に広がり、虹色旗（rainbow flag）を多様性のシンボルとして掲げ、自分たちの自尊感情を高め、広く社会に存在を示し、共生社会の実

41) 2004年に「性同一性障害者の性別の取扱いの特例に関する法律」が施行され（2008年に改正）たが、当事者からは不備や、問題点が指摘されている。

42) 日本性教育協会の「第6回青少年の性行動全国調査（2005）」（『若者の性白書』小学館、2007）のなかに「同性と性行為をすること」についてどう思うかという質問がある。大学生の回答結果を見ると、「かまわない」という割合は26～26%で男女に違いはないが、「よくない」という割合は女性より男性の方が2倍以上（15.2%→35.7%）あり、男性の方が女性よりも同性愛嫌悪の傾向が強いように思われる。その理由については推測の域を出ないが、男性は「男は男らしく」というジェンダーへの自律的なとらわれが女性よりも根強いのではないかと思われる。

現を求めるプライドフェスティバルやゲイパレードなどと呼ばれる催しが、今では世界各地で開かれるようになってきている⁴³⁾。日本でも近年、NHK 教育テレビの「ハートをつなごう」などの番組が LGBT について積極的に取り上げるようになり、「東京レインボープライド」などの催しも開かれるようになってきた。しかし、日本ではまだ同性愛など性的マイノリティへの関心も認知度も低く、企業での性的マイノリティに配慮した取り組みもほとんどなされていないのが現状である⁴⁴⁾。

13 エンターテインメント化とセックスレス化を越えて

人間のセクシャリティについてまとめると、そこには3つの側面があった。

1つ目は最古層とも言うべき「生殖としての性」の側面である。避妊による非生殖的な性行為がむしろ日常的になった現在、子どもを生みたいと欲する時以外には後景に退いているこの側面が、「不妊」や「望まぬ妊娠」といった事態になると前面に躍り出て、「性」の元来の意味・役割が「生殖」にあったのだということを我々に思い知らせる。

2つ目は、「関係としての性」の側面である。子どもを生み育てるという営みから出発して、それに協力しあう者たちの親密関係の絆となったのが「性行為」である。人間において性行為にともなう快感が高められ、性愛の技法 (Ars Amatoria) が洗練されてきたのも、特別な親密関係を構築し、確認し、維持するという志向があつてのことである。これが、人間のセクシュアリティの中心であろう。

3つ目は、性愛にともなう楽しみが親密関係に必ずしも拘束されず、あるいはそれを離れて自己目的化する「楽しみとしての性」の側面である。諸欲求の自立化は人間において広く見られる現象であり、「性」においてもまた例外ではない。しかし、美味の追求が不健康な食生活に偏したり、記録への挑戦がドーピングの不正を生んだりするように、人と人との親密関係という基盤を失った快楽追求としての「性」は、さまざまな疎外形態へと墮する危険性を孕んでいる。とりわけ、妊娠・出産の主体となれない男性のセクシュアリティが、そうした逸脱に陥りやすい弱さを持っていることは、もっと自覚されるべきだろう。しかしながら、現実には逆に、男性は思春期になると、「性」は単なる娯楽・慰み (entertainment) として消費するもので、女の身体はそのための道具として利用してもいいのだ、それで女も悦ぶのだという見方や習慣を、アダルトビデオやネットの性情報などから教えられる。女性のなかにも、「性」がそういうものなら自分もそれを逆に利用して

43) 2012年5月9日、アメリカのオバマ大統領が現職の大統領として史上初めて同性婚を支持するとテレビ会見で公式に表明した。近づく大統領選挙をにらんだ政治的な表明であろうが、ギャラップ社の調査では、米国民の51%がそれに賛同し、反対意見は45%だったと CNN が伝えている (<http://www.cnn.co.jp/usa/30006558.html>)。

44) その理由について「東京レインボープライド2012」の主催者の一人は、個人的な仮説とことわったうえで「高度経済成長時代に出来上がった『普通みたいなもの』、つまりお父さんが働きお母さんが家において、子どもたちがいるという生き方の枠から広がっていけないのではないのでしょうか」と分析している (『ゲイとレズビアンが誇りをもって輝く日 4.29 (後編)』<http://www.excite.co.jp/News/bit/E1335512765830.html>)。

楽しんでやろう、儲けてやろうと思う人もいる。そうした「性のエンターテインメント化」が性行動の見かけ上の活発化をうながす一方で、先に示したように、そうした「性」の現状に嫌悪感を抱き性行動から背を向ける人たちも出てきている。このように今日、人間のセクシュアリティにおいて「エンターテインメント化」と「セックスレス化」⁴⁵⁾の両極化が進行しているように思える。

日本人の性行為の頻度の少なさが世界的にも際立っていることは、デュレックス社の調査で毎回のように言われているが、それが数量的な事柄である限りは、とりたてて問題にすべきことではない。しかし、もしもセックスレス化という現象が、日本人の親密関係への無関心や人間関係の希薄化の進行を表しているのだとすれば、そこには大きな問題があると受けとめなければならない。つまり、人間のセクシュアリティの根幹をなすと考える「関係としての性」の空洞化という問題である。「生きる意味の空洞化」=実存的空虚を埋めるために、次々に見知らぬ相手と性行為を重ねる性依存の女性の話を先に紹介したが、「性」と「生」とが表裏一体をなすものであるとすれば、親密関係という中身が空洞化しエンターテインメントという形式（抜け殻）だけになった「性」と、生きる意味という中身が空洞化し苦役的労働と際限のない消費のための消費という形式（抜け殻）だけになった「生」とは、同じ事態の二つの現れと見るべきであろう。とすれば我々は、人間の「生」と「性」を、「生きるに値する意味のある生き方」や「かけがえのない相手との親密関係のなかで心ゆくまで楽しむ性」へと取り戻すことを、いや創造的に立て直すことを、真剣に考えないといけない時に来ているのではないだろうか。人間のセクシュアリティについて考え、自分自身のセクシュアリティと向き合うなかから、人間のあり方や生き方、人間社会のあり方を問い直すことが求められている。

45) 日本における人工妊娠中絶実施件数は1955年から減少を続け、2010年度には212,665件にまでなった。北村邦夫氏は近年の中絶件数減少の要因として、「性交頻度の減少」つまり「婚姻関係にあるカップルのセックスレス化が進むだけでなく、若い世代でもセックス離れが進行している」としか考えられないと述べている（読売新聞コラム「Dr. 北村の「性」の診察室ブログ」2011.11.18.）。